日本キリスト改革派 芦屋教会 月報	2024年1月号（No.431）

巻頭言 「マリアとクリスマス・オラトリオ」

宇野 元

第五福音書記者とも言われるヨハン・セバスティアン・バッハ。降誕祭の 12 月 25 日から新年の 1 月 6 日にかけて演奏されたカンタータ「クリスマス・オラトリオ」は、イエス・キリスト誕生についての聖書の言葉と、作詞者が書いた言葉から成ります。それにバッハの作曲が豊かに呼応して、神学的で音楽的な解釈が生みだされます。

カンタータの第３部において、羊飼いたちの知らせを聞いたマリアが取り上げられます。「聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」（ルカ 2, 18.19）。福音書の言葉が語られると、それに答えるように、アルトによる独唱がはじまります。

わが心よ、この幸いな出来事を、信仰のうちにしっかり納めよう。神のこの不思議な業によって、弱い信仰が、いつも力づけられるようにしよう。

さらに同じアルトによるレチタティーヴォ（叙唱）と、それにコラール合唱が加わって、共同体の応答が表されます。

そうだ、そうだ。このよき時に、幸いにも確かな証しとして知り得たことを、わが心のうちに保たなければならない。

私は熱心に、心のうちにあなたを保ちます。そしてここで生きてまいります。また逝きましょう。遂にはもう一つの人生において、喜びに満たされ、時を超えて、御許で舞いましょう。

ある人が述べています。バッハがその音楽において取り組んだことは、キリスト者の共同体にとって大切なことがよく保たれることであると。キリスト者の共同体にとって大切なこと――それは、神が私たちと私たちの世界を顧みてくださり、私たちのために来てくださったことです。神が人となられ、歩まれた。そしてこのよき知らせを新鮮に、生き生きと保つこと。このことがマリアに示されます。まさにバッハの音楽を聴くたびに心が踊るように、いつもこの知らせを喜び、この知らせの豊かさを味わう者であるように。